

武蔵野日曜聖書講筵

愛神

詩篇第116篇

1981年1月11日

小池辰雄

われエホバを愛しむ なんじの平安にかえれ お母さんというパラダイスの中に 投身・祈入
十字架という門 愛神救人 聖意即身 キリストの中に帰れ 救いのさかずき 愛せられたる
者の死

【詩篇116】

- 1 われエホバを愛しむ。
そはわが声とわが願望とをききたまえばなり。
- 2 エホバみみを我にかたぶけたまいしが故に、
われ世にあらんかぎりエホバを呼びまつらん。
- 3 死の縄われをまとい陰府のくるしみ我にのぞめり。
われは患難とうれいとにあえり。
- 4 その時われエホバの名をよべり。
エホバよ願わくはわが靈魂をすくいたまえと。
- 5 エホバは恩恵ゆたかにして公義ましませり。
われらの神はあわれみ深し。
- 6 エホバは愚かなるものを護りたもう。
われ卑くせられしがエホバ我をすくいたまえり。
- 7 わが靈魂よなんじの平安にかえれ。
エホバは豊かになんじを待いたまえばなり。
- 8 汝はわがたましひを死より、
わが目をなみだより、
わが足を顛蹶よりたすけいだしたまいき。
- 9 われは活けるものの国にてエホバの前にあゆまん。
- 10 われ大いになやめりといいつつもなお信じたり。
- 11 われ慌てしときに云らく、すべての人はいつわりなりと。
- 12 我いかにしてその賜えるもろもろの恩恵をエホバにむくいんや。
- 13 われ救いのさかずきをとりてエホバの名をよびまつらん。



14 我すべての民のまえにてエホバにわが誓いをつぐのわん。

15 エホバの聖徒の死はそのみまえにて貴とし。

16 エホバよ誠にわれはなんじの僕なり。

われはなんじの婢女の子にして汝のしもべなり。

なんじわが繚綯をときたまえり。

17 われ感謝をそなえものとして汝にささげん。

われエホバの名をよばん。

18 我すべての民のまえにて エホバにわがちかいを償わん。

19 エルサレムよ汝のなかにてエホバのいえの大庭のなかにて

此をつぐのうべし。エホバを讃まつれ。

●われエホバを愛しむ

1 われエホバを愛しむ。

ヘブライ語は「アツハブテイー」というただ一語です。ヘブライ語というのは、一つの短い文章が接頭詞、接尾詞でもつて一つの語になってしまう。

そはわが声とわが願望とをききたまえばなり。

ヘブライの詩も、漢文の詩と同じように対句になっている。「わが声」「わが願望」と、同じことをいろいろな表現をするわけです。こういう声かというところ、「わが願いの声」です。ところが、「わが声」「わが願望」と二つにわけると、かえってそれが、「わが願いの声」という一つ概念にしてしまうよりか、弾力性が出てくる。

2 エホバみを我にかたぶけたまいしが故に、

われ世にあらんかぎりエホバを呼びまつらん。

こちらの悲願を神さまの方で受けてくださった。だから、世にあらんかぎりいつまでも、死ぬまでエホバを呼びまつらんと。「世にあらんかぎり」というのは「私のすべての日」というような言い方をしている。

3 死の縄われをまとい陰府のくるしみ我にのぞめり。

何か病気が、または外敵のことか。詩篇というのはなかなかその具体的なことを言わない。

われは患難とうれいとにあえり。

これもどんな悩みだか、どんな憂いだか分からない。「患難」という言い方はむしろ客観的で、「うれしい」というのは主観的な言い方です。

4 その時われエホバの名をよべり。

エホバよ願わくはわが靈魂をすくいたまえと。

「靈魂」というのは、「ネフェエシュ」という「ソウル」という字が使っている。普通、ヘブライ語では、霊と心との中間がこの「たましい」という字です。「ネフェエシュ」という字は、



霊肉渾然たる存在そのものも「たましい」という言い方をする。「自分自身」というときにも使う。「魂心」というような気持のときにも、この「ネフェエシュ」という字を使う。日本語が非常に豊かになったのは、漢字の熟語が使えるからです。それを何か制限したら、とんでもない話です。

5 エホバは恩恵^{めぐみ}ゆたかにして公義^{ただしく}ましませり。

「公義」は「義」「セデック」という字が使つてある。「サッディーク」という形ですけれども。「恩恵」という字は「ハンヌーン」という字で、これはまさに「グレイス」「恵み」という字です。

「恵みが豊かで、義である」

と。「義である」という言い方で、非常に簡単です。「公義」という字は、むしろ「公」の字は要らん。「汝は義にましませり」ということ。

われらの神はあわれみ深し。

「あわれみ」という字は、神さまの愛の方の「ラツハム」という字から「エラツハム」という言い方になっています。「義」と「愛」は非常に大事な二つの言葉です。「あわれみ深し」の「深し」という形容詞はないけれども、この訳は結構です。「あわれみそのものである」というような言い方ですから、「あわれみ深し」でいいわけです。

「我らの神はあわれみそのものである」

ということ。

6 エホバは愚かなるものを護りたもう。

われ卑^{ひく}くせられしがエホバ我をすくいたまえり。

普通、「愚か」というと、神を信じないことを「愚か」というけれども、この場合はそうではない。この場合はむしろ、「単純」という意味です。単純な者。心の非常に単純率直な者を護りたもう。いろんなことを考えたり謀^{はか}つたりしない方です。シンプルネスです。

●なんじの平安にかえれ

7 わが靈魂よなんじの平安^{やすき}にかえれ。

エホバは豊かになんじを待^{まち}いたまえばなり。

7 節はちよつと気をつけてください。「帰る」という字は「シューブ」という字です。自分に対して「帰れよ」という言い方で、「シュービー」という形になっています。

「わが魂よ、帰れよ」

と言う。

8 汝はわがたましひを死より、わが目をなみだより、

わが足を顛蹶^{つまずき}よりたすけいだしたまいき。

7 節、8 節は大事ですね。「わが魂を、わが目を、わが足を」と。霊と心と体^{からだ}だね。「目は心の窓」と言われる。「死より、涙より、躓^{つまず}きより」と。中身は具体的ではないけれども、



表現は非常に身近な言い方をしています。

9 われは活けるものの国にてエホバの前にあゆまん。

10 われ大いになやめりといいつつもなお信じたり。

「信じる」という字は「アーメン」という字から来ている。

11 われ慌^{あわ}てしときに云^いらく、すべての人はいつわりなりと。

「慌^{あわ}てしとき」という訳がちよつとおかしい。むしろ、これは追い詰められたような状態です。いろいろの苦難で追い詰められて、その時に結局、人間は偽りだと。こういうことらしい。

12 我いかにしてその賜えるもろもろの恩恵^{めぐみ}をエホバにむくいんや。

エホバにお返しができるかと。

13 われ救いのさかずきをとりてエホバの名^{みな}をよびまつらん。

「救いのさかずき」と、妙なことを言っているな。そう書いてある。

14 我すべての民のまえにてエホバにわが誓いをつぐのわん。

15 エホバの聖徒の死はそのみまえにて貴^{とう}とし。

16 エホバよ誠にわれはなんじの僕なり。

われはなんじの婢女^{はしため}の子にして汝のしもべなり。

なんじわが繯^{いましめ}縋^すをときたまえり。

17 われ感謝をそなえものとして汝にささげん。

われエホバの名^{みな}をよばん。

18 我すべての民のまえにて エホバにわがちかいを償^{つぐな}わん。

19 エルサレムよ汝のなかにてエホバのいえの大庭のなかにて

此をつぐのうべし。エホバを讃^{ほめ}まつれ。

何といつても、この詩篇116篇のキーノートは第一言の、

「われエホバを愛^{いっく}しむ」

に帰するんです。だから、題に「愛神」と書いた。「愛神」というと、こういう熟語は「愛の神」という意味と、「神を愛する」意味と、どっちも持つ。普通は、「神を愛する」とひっくり返るけれども。西郷南洲の言葉の「敬天愛人」の「人を愛する」というように。

「神を愛する」

は、私たちにとっては

「キリストを愛する」

でいいわけです。キリストを愛する、神を愛する、とはどういうことですかね。本当に神さまを愛してますかというのと、躊躇するわけだよな。友人を愛したり、恋人を愛したりするのちよつと違うから。愛せないんですよ、我々は神さまを。我々にはキリストも愛せない。「愛する」なんて言ったって、それはちよつと無理だ。無理なことを私は言いたくない。無理なお説教なんかもうごめんだよな、君たちも。



「今日は、神さまを愛せよと言われたけれども、これはちょっと無理ですね」
なんて。しかし、それでお終いだっただろうがない。

愛せない。今言ったように、行き詰まる。もし、「神を愛する」なんて言ったら、それは、
「総ての人はいつわりなり」

ということになる。さっきの11節と同じように。この詩篇の中に書いてある。

●お母さんというパラダイスの中に

そこへいくと、小さいお子さんたちは我々よりか上だよな。お母さんを愛している。すぐ、
「お母ちゃん」

というわけだ。お母さんも子供を愛している。本当にそれは素晴らしい間柄です。小さい
子はお母さんから離れないもの。あれがその愛している姿なんだ、おさなご幼児がね。我々はな
なかその小さい子にはなれない。それくらい、パラダイス・ロスト（樂園喪失）なんだ。小
さい子はパラダイスの中にいるんだよ、お母さんというパラダイスの中に。
だから、仕方がない。

「神の中に投身せよ、キリストの中に投身せよ」

ということですよ。これはできる。「愛する」ことはできないけれども、「投身する」ことはで
きる。行き詰まるから、仕方がないから。

「主さま！ SOSです、助けてください！」

というわけだ。投身です。

「帰れ」

とそこに書いてある。

「投身、帰入、祈入」

祈り入る。これが、

「神を愛する、キリストを愛する」

ということですよ。我々の心で愛せるかというんだ。冗談言うな、それが何になるかと。自
分自身を投げ入れると、

「よし、お前はよく入ってきたな」

と言つてくださる。これです。キリストがそうだったんだ。神さまの中に彼は自分を投げ
入れて、懐の中にいたんだから。これが「愛する」ということなんだ。

「わが懐の中に来よ」

と。そうしたら今度は、神の愛が、キリストの愛が、我々の中で働きます。このキリスト
の愛が即ち聖霊です。

「聖霊とは何か？」

なんて考えることはない。具体的にキリストの愛を受けてくださいよ。私はしょっちゅう



申し上げているとおり、

「聖書はドラマなんだから、その中に自分を投げ入れて——聖書を読むのではなくて——聖書に聴き、また捕らえられ、ぶっ倒される」

パウロのように。そうしたら、もうキリストの愛がもの凄いから。パウロは、

「この愛から誰が離せるか」

と、ローマ書8章の終りで絶叫しているではないですか。絶叫ですよ、これは。

何があったって、集会へ来たらいいではないですか。何のための日曜んですか。日曜をなぜ遠慮しているのか。この世のことに囚われているのはだめだよ。一切を投げ捨ててやって来れば——何も私は日曜の集会そのことをただ言っているのではないけれども——日曜の集会に、

「今日は、しょうがないけれども、また、身体の具合が悪いけれども、しかし集会に行こう」

と言つてやって来れば、集会をやっているうちに治ってしまうんだよ。解けなかった問題が解けてしまう。日曜に生命懸けで集会に来る。私は、その激しさをもたない人は本当に気の毒だと思う。あなた方、生命懸けで来ない人はもう来なくていいよ。いい加減な気持ちで、

「先生に叱られるから」

なんて、何を言っているか。私は、あなた方と一緒に、キリストの中に日曜毎に入っているんだから。

●投身・祈入

これがその

「投身、祈入」

ということ。これが本当に「愛する」ということです。

「分かった！ 愛するとはそういうことだったか」

と。あなた方のはらわたからこれを「アーメン！」と言ってもらわなければ困る。

「われエホバを愛す」

と。私はこの一言にきて、これは一体どうしてくれるかと思って、今朝も祈っていた。それで、この「愛する」がそこへ来たわけです。

昨日も他の原稿を書いていて、午前3時までかかった。まあね、正直、これから戦うべきことがいくらでもある。

「生きることは戦ふことなり」(ビバーレ エスト ミリターレ)

というセネカの言葉がある。それは自己との戦いが一番の戦いです。これはカントも言っている。

「自分自身と戦ふことは最も困難な戦いである。自分自身に打ち勝つことは最大の勝利」



なり」

とはカントの言葉です。それは自力^{じりき}ではできない。ところが、「神を愛する」と、投身すると、祈入すると、これに勝つてしまう。もう、自分がいないんだから。戦うべき自分がなくなっているんだ。中に入ってしまったっているから。

中へ入らないから、自分と戦うんだけど。自分自身をキリストの中へ入れてしまつたら、もう戦う自分がいなくなつて、無敵になつてしまふ。

「戦おうと思つたら、相手がいませんでした」

と。それが天下無敵ということ。

「不敵な野郎だな」

なんて、本当に不敵な野郎だよ、敵無しということ。あなた方、黙つて自分で深く祈つて、その中に入つてごらん。もうたまらんから。ヘタすると、身体がもち上がつてしまふぞ。爆発するよ。さつき、司会者が「気違い」と言つたが、本当に気違いです、私は。普通の気とは違うけれども、非常識ということではないですよ、超常識なんだ。

それが、

「われエホバを愛す」

ということ。「エホバを」ではなくて――「エホバ」というと三人称的な言い方だから――「われ汝を愛す」ということ。

「主われを愛す」

という讚美歌があるね。あれは讚美歌のアルファでオメガです。始めて終りです。ということは、そのようにして投身するのは、投身せざるを得ないようになっていくからです。自分で投身しているのではないんだ、本当は。投身せざるを得ないようになっていく。なるとなれば、「主われを愛す」からです。皆さん一人びとりが愛されている。一人びとりは比較することができない愛をいただいているんです。他の人と比較することはない。

「神さまはあの人をだいぶ愛しているようだが、私の方はちよつと薄いようだ」

なんて、そんなことはない。みんな内容がちがうだけの話です。一視同仁というんだ、神さまの方は。

「神さまは一切のものに陽を照らし、雨を降らせる。その如く全かれ^{まつた}」

とキリストが言われた、あの「全き」というものが神さまの慈悲であり愛である。

「神の慈悲なるが如く慈悲なれ」

と、あの「全き」という字は「慈悲」であるということ。ルカ伝では書いてある。愛だけが全きものなんです。その他は、全きものではない。

5節に、

「エホバは恵み豊かで義であつて、憫み^{あわれ}が深い」

という。それはさつきイザヤ書53章で読まれたように、義人、神の僕ということ。神さま



の意志を行ずる者が「僕」である。その神さまの意志を行ずることが「義」であるんです。ただ義ただしいなんていうのではない。

「聖意を体现する人が義人である」

と。ところが、これはキリストの他には誰もできなかった。

「義人なし一人だになし」

とパウロが言った。パウロは律法を守った。だけれどもダメ。本当の律法の本質を守るために、神さまに従っていなかったらね。神さまをそっちのけで、

「律法、律法」

とやっていた。これがユダヤ教のパリサイ根性です。

「偽善なる学者、パリサイ人よ」

とキリストが言ったのは、そこを突いたわけです。

●十字架という門

7 わが靈魂よなんじの平安やすきにかえれ。

エホバは豊かになんじを待あしいたまえばなり。

「わが魂よ、帰れ」

という。この「帰れ」は、私は「帰入せよ」と言う。

「帰入入れ」

ということですよ。「入」の字を忘れては困るよ。帰って、門口で立っていたのでは困るよ、入って行かなければ。

「わが魂よ、帰入せよ」

というわけだ。私は楽しくてしょうがないんだが、皆さんはどうなんだね？ キリストの中に帰入している。そういう祈りを本当にしていますか。そうしたらもう、「聖霊」なんて言わなくたって、聖霊は来ているんです。ええ。帰入すれば。「十字架という門」を通るんだから。この門を通らなくては入れないんだから、「入れ」なんて言ったって。

「我は門なり」

とキリストは仰る。キリストは門なんだ。キリストを通らなければ、天国の聖霊の充滿しているところの詩篇23篇みたいなのところに入れない。だけれども、十字架は無条件に入れてください。

「今までこうでしたから、どうも申し訳ありません。だから、私はちよつとまだ遠慮しておきます」

なんて、そうじゃないよ。申し訳ないから、やって来たんだ。申し訳ないから、十字架にやって来た。十字架で解決されない問題はひとつもないんです。

ところが、人間は審くんだよな。



「ああだ、こうだ」

と言って、人のことを。審く人はここに入れないんです、そういう審きをしている者は。

「審くなかれ」

とキリストが山上の大告白で言っておられるでしょ。

「もつと凄い審きを受けてしまうぞ」

と。第三者のことをとやかく言うのは、これはサタンの配下にいることになる。人を誉めることはいいよ。陰口はとんでもない。それはやがて裏切りとなる。

●愛神救人

「十字架でもうお前の過去も現在も未来も全部、私が贖いとったから、心配いらんと。もう無条件に、

「ありがとうございます」

よりほかにどういう言葉があるんですか。「それでも」と言うんですか。

「それでも、こうですから」

と言うんですか。私は何も言わん。無条件に心からの感謝をもって受けとるだけです。

キリストの中へ祈入するんです。もうそれは聖霊の世界ですよ。なにか「聖霊」と言うかね、

「聖霊というのはどういうんでしょうか？ 何か神秘的な体験なんでしょうか？」

なんて。そんなことは何もない。入ると、神秘的なことが自在に今度は起きてくる。入ると、起きてくるんですよ。考えているのではない。

そうすると、あなた方は人を助ける。「愛神」の後に、私はよつぽと書こうと思ったんだが、わざと書かなかった。

「愛神救人」

なんだ。人を助け救うんです。愛神救人と展開しなかったら、この愛神がまた愛神でない。神さまの中に入ったら、今度はそこから、キリストの中から出てきて——仏教で

「往相還相」
おうそうげんそう

というが、還相で——どこへでも行つて人を助けてしまう。紅灯の巷ちまたであろうとどこだろうと、一向差し支えない。

文殊もんじゅはそのことをやった。文殊は紅灯の巷で可哀相な女の人たちを助けてやった。他の

僧たちが、

「あの野郎は紅灯の巷で遊んで来やがった。あれをやっつけてしまえ。お釈迦さん、あれをぶつ叩いていいですか」

なんて。

「ぶつ叩いてみる」

と、お釈迦さんは大体分かったと思うんだけど。叩こうとしたら、答が動かない。文



殊の中に如来の霊が満ち満ちているから、打とうとしたやつが霊縛されてしまうんです。
「参った、文殊は本ものだ」

「並居る者ことごとく文殊となれり」
という。全部、文殊に化せられたと。素晴らしい文句だよ。並居る者みな太陽の光に照らされたりというようなことだ。

皆さん、そういうような「愛神」となって、その世界に入って全身火のようになったら、「救人」ができるんです。自分の側のいかなる何ものでもない。だから、私は

「無」

と言っている。自分の側に何か残しているから、いつまでたっても始まらない。空気みたいなんだ。見えないんだ、何も。見えないけれども、空気が充滿しているように、御霊は見えないけれども、霊的なものが充滿している。これはもう

「限らない世界」

です、その先は。まだまだ、私なんてものは入口みたいなものだ。

●聖意即身

7 わが^{たましい}靈魂よなんじの^{やすき}平安にかえれ。

この「平安」という字は「シャーローム」という字ではない。けれども、この詩の中に「シャーローム」という字と語源が同じ字がある。18節に、

18 我すべての民のまゐにて エホバにわが^{つぐの}ちかいを償わん。

とある。この

「償う」

という字が「シャーローム」と同じ語形の字で

「シャーレーム」

という字です。ヘブライ語の「シャーレーム」という言葉は、神さまと非常に親しい間柄になるような、

「親しい間柄にある」

という字なんです。それがなぜ、「償う」になるかというと、「親しい間柄になる」ということは、自分を本当に相手のひとに任せてしまう。信頼する、

「信愛する」

ということ。だから、

「献げる」

という意味にもなるし、「償う」という意味にもなってしまう。非常に幅のある、深みのある、弾力性のある言葉です。そういった間柄であることが今度は、



「シャーローム」「平安」

なんです。だから、「平安なれ」ということは——神さまと、キリストと一つでないところに平安はない——縦の関係が今度はむしろ、内的関係になってしまっている。内的関係になっっているのが、この「シャーローム」という字です。

私はお手紙に必ず封筒の上に「平安」と書くのは、そういう意味で書いている。「この手紙の内容が平安だ」と、そんなことではない。

「平安に帰れ」

という。「平安」という言葉で、私はすぐ浮かぶのは、ダンテの『神曲』の「天国篇」第三歌の有名な、

「彼の意志が我らの平安である」

という言葉です。平安というのは、今度はそういった角度からいうと、

「御意のあるところに平安がある」

ということ。御意にこつちが即していなければいかん。聖意に即身していなければ。

「聖意即身」

体現していなければ、そこに平安はないわけです。

「みな我らの意志を自ずから一つにする聖旨のうちに己を置くことが、この恵まれた者たちの本性である」

と。これは素晴らしい言葉だね。79行から81行の言葉だ。

「我らの意志を自ずから一つにしまつてこの聖旨の中に自分を置くことが、この恵まれた者の本性である」

と。これが『神曲』の中の言葉なんだ。

あなた方は『神曲』はじっくり読みなさいよ。『神曲』は、そういう宗教的な深い真理ではゲーテ以上です。ゲーテの『ファウスト』にも素晴らしい言葉がたくさん溢れているけれども。まあ、何と言ったって、ダンテとゲーテだね。シェークスピアもまた別な意味で凄いけれども。シェークスピアの劇なんかを読んでいると、とにかく素晴らしい言葉が散りばめられている。偉大な文学をしつかり読みなさい。私なんかもう遅ればせだったんだ。いい加減なものを読むことはない。第一級なものを読むこと。私の中学の漢文の本に、

「すべからず第一等の書を読め」

という文句があった。二流、三流は要らん。

「歌を学ぼうと思う人は万葉集を読め。他は要らん」

という。今の青年諸君は古典に帰らなければダメだ。

「古典に帰れ」

ということ。私は時々、一年くらい何もしないで、本ばかり読んでいたくなるよな。そうはいかんけれども。



「これ彼が創造し、自然が造る一切のものの注ぐ海である」
と。その平安のところはね。

「そこで、よし至高善の恩寵が一樣にここに雨降らすとも、天にあつては至るところが
パラダイスであるわけが私に明らかになった」

と。大変だな、ダンテというやつは。もう圧倒されるね、こういう詩の文句には。

●キリストの中に帰れ

「シャーローム」(平安)というのは、そういった内在関係の中に親しくなること。「シャー
レーム」(償う)という言葉がそういうところから来っていて、「シャーローム」と相通じてい
ます。

「キリストの中に帰れ」

ということが即ち、

「平安に帰れ」

の一番具体的な言葉になるわけです。キリストの中に帰れということ。

「汝の意志のあるところに平安あり」

というよりか、もうひとつ強い表現になる。キリストの中に入ると、そこは、平安は力です。
いいですか。ノホホンとしているような世界ではないですよ、この平安というのは。

「ああ、楽しいな。おしまい」

ではない。これはもう、力と生命が満ちてくるんです。その力も愛の力です。

ゲーテが『エッকারマンとの会話』で言ってます。ゲーテにとっては、愛は神さまの愛の「メ
タモルフオーゼ」(変質変貌)なんです。

「神さまの愛が千変万化、いろいろな形で現れている。全部、神の愛からきている。

恋愛であろうと、親子の愛であろうと、友人の愛であろうと、何でも全部、神か
ら来ている」

と。偉いよ、ゲーテという魂は。愛をいろいろ分析して、エロースだのアガペーだのと、
あんなことは――そこにも相対的な真理はあるけれども――そうじゃないんですよ。全部、
神さまのものです。だから、ゲーテという人は非常に太陽のように明るい。

¹⁰ われ大いになやめりといいつつもなお信じたり。

悩みの中にあつても、信じぬくこと。

よく、ギリシヤ語の表現では

「に信ずる」(ピステオー)

という字を使うが、「に信ずる」なんていうへんてこな日本語を使うことがある。あれは塚
本先生が言いだしたんだろうな。

「何々に信ずる」



なんて、あれは日本語かね。「に信頼する」ならわかるけれども。「信ずる」は「を信ずる」でいいよ。

「キリストに信入する」

ならわかる。私なら、「に信ずる」なんて言わないで、「に信入する」と言う。キリストに信入します。キリストに信じ入ります。みんな、「入る」です。入らなければダメなんです。お客さんがあつたときに、門前でもつてただ話すのではなくて、

「どうぞ、お入りください」

と、みなさんは言っているでしょ。「お入りください」なんだ。入って行かなくては。入っていかなければ、落ち着いて話もできない。

頭で聞いていたらダメだよ、私の言っていることを。全存在で受けとつてください。聞くのではなくて受けとるんです。耳はただそのちよつと、そのスイッチにすぎない。

●救いのさかずき

¹¹われ慌てしときに云らく、すべての人はいつわりなりと。

だから、私は

「破れ」「砕け」

ということを言うわけです。『無者キリスト』の第二部の一番先に「破れ」と書いたでしょ。その次に「砕け」と書いたでしょ。「破れ」「砕け」を本当に体験するまではいつわりですよ。すぐ「真実」なんて言つて、凝り固まつてしまっている。

こないだのテレビの宮本武蔵も素晴らしかったけれども、あれはもつと八方破れの姿がもう少しほしかったな。隙だらけの、すきのないという世界。ただ身構えていたのではダメです。だけでも、なかなかいいところがあつたよな。

¹²我いかにしてその賜えるもろの恩恵をエホバにむくいんや。

報いることができるかと。ユダヤ人は「報い」（報復）ということが相当強い国民です。

「目には目を、歯には歯を」

と。これが報いの世界です。

ところが、キリストは「罪」に何で報いてくれたかというところ、「恵み」で報いてくれた。我々の罪に対して、恵みで報いてくださった。「赦し」で報いてくださった。これには参つてしまふ。愛の、消極的といいますか、隠れた面は赦しということです。罪の赦しということ。これは愛がなければ、この赦しはできないんだ。

ところが、私たちは、キリストのこの「絶対恩寵」に報いることはできない。旧約はそんなことを言っているけれども。それではどうしたらいいんですか。それは、我々が証者となること、証し人となること。これが報いです。神さまに対する、恵みに対する報いは、我々が証し人となること。その恵みを自分を通して人に現すこと。人に施しをすること。キリ



ストの愛を實力をもって施しをすること。それが証者です。その施しは、その内容はその人その人によっていろいろです。とにかく、その人を通して、キリストの力がいろんな形で現れるわけです。まあ、具体的に今言うことはないでしょう。

この集会は楽しいね、正直。皆さんと気持は今、一つになっている。

¹³われ救いのさかずきをとりてエホバの名をよびまつらん。

どうしますかね、これ、「救いのさかずき」とは。

「われ救いのさかずきとなりて、エホバの名を呼びまつらん」

ということ。自分自身が「救いのさかずき」となればいいわけです。人に飲ませるものに。

「どうぞ、私の中の聖霊をどしどし流しますから、飲んでください。受けとってください」

ださい」

と。神さまの「救いのさかずき」に成るんだから、こんなうれしいことはありはしない。

¹⁴我すべての民のまゐりにてエホバにわが誓いをつぐのわん。

「つぐのう」という字がここにも出てきた。これもやはり同じ字が使つてある。さっきの「シヤーレーム」という字。おもしろいね、この「償う」という字は。「自分を献げる」意味です。

「誓いの通りに自分を献げます」

ということですよ。

●愛せられたる者の死

¹⁵エホバの聖徒の死はそのまゐりにて貴とし。

「聖徒」というのは「ハッシード」という。これは

「ヘセッド」「愛」

という字から来ている。この「聖徒」という字は

「神の愛をこうむった者」

という意味です。これは何も「神聖」の「聖」の字ではない。「ハッシデーム」ということをマルチン・ブーバーが非常に書いてますけれども。「ハッシード」は「愛せられたる者」。私は詩篇の訳の中でそのようなことを書いたような気がする。「神愛者」と書いたかも知れない。

「恵信者」

かな。本当は直訳すると、「愛された者」です。こつちから言うと、「恵信」になるんだね。

神を畏れる者。

「畏神」

恵信。畏れ信ずる「畏信」と書いた方がいい。こういう熟語はないけれどもね。

「愛せられたる者の死は

即ちこつちから言うと、恵信者の死は

そのまゐりにて貴し」



ということです。

16 エホバよ誠にわれはなんじの僕なり。

われはなんじの婢女はしための子にして汝のしもべなり。
なんじわが繚綯いましめをときたまえり。

と、畳みかけて言っているな、この16節は。

「あなたの御意が楽しくてしょうがないんです」

というわけだ、この「僕」というのは。

「ただ仕方がないから従う」

なんていうのではない。「服従」という言葉がある。あれは私はあまり好きではない。藤井先生が『聖書の結婚観』の中で、

「妻は夫に絶対に服従だ」

なんて書いてある。だから、新しい人たちは、あの藤井先生の「結婚観」は苦しくてやりきらない。やっぱり、これはもし「従う」なら、

「信従」

だよ。信じ従わなくては。「服」の字は困るんだ。

「僕」という字は「エベツト」という字です。「婢しもめ」のほうは「アーマー」という。即ち、神さまの言葉を楽しく受けとって、そして、これに従い、また行ずる者が「エベツト」であり「アーマー」である。

「われは汝の婢はしためなり、汝の御意みこころのわれに成れかし」

とマリヤが言ったでしょ。

「何か不思議なことが起きるけれども、仕方がない。私はあなたの婢だから、仰るように成ってください」と。

17 われ感謝をそなえものとして汝にささげん。

われエホバの名みなをよばん。

恵みを何らかの形において現さなくてはいいかん。感謝の気持をね。

集会でも――こんなことは言いたくないけれども――感謝の気持を表さない方は大体、信仰でうまくないです。神さまに対する、あの「レプタ二枚」のように。ものの分量のことを私は言っているのではない。そこに注がれたその人の心がわかるんです。私はもう、これからの生涯を本当に神さまに献げなくては。皆さんにこうやって愛されているからね。

「政治」〔小池辰雄著作集第六巻『随想集』247頁〕、「方法帰一」〔同第三巻『無の神学』202頁〕を朗読。割愛〕

